New seasons 四つの季節

中堂　けいこ

春…むらさき芋虫

お気に入りの斑入り蔦にはきまって芋虫がついた。青々とした葉にクリーム色の縁どりがあるのをむらさきの糞で染みをつくる。青と黄と腸内細菌でむらさき色になるのが腑におちない。さわやかな小葉を食べながら芋虫は丸い花壇をむらさき色に染めるのだった。わたしはサンダルのかかとで彼らを退治しなければならない。夏になる前に、春が終わる前に、ぬるぬると踏みつけねばならない、ならない、芋虫はころころころがりながらサンダルのつま先から脱げるのだった。

夏…ハチャトウリアンによる禿山の一夜

だからいわないこっちゃないよ、七十八回転の赤茶けた紙封筒から、そもそも無理なのだ、四角い紙袋に丸いレコードを入れ込むなんて。大人の目を盗んで炭素繊維のレコード盤を取り出し、テーブルの中心にさしこむ。ここからとても難しいのだ。震えてはいけない、いけない、だが不穏なヴァイオリンの旋律が響く頃にわぁっとわぁぁっと、ハチャトウリアンがふりむくのだった。ギン！と切れた盤のその中心で冷たい風が吹きまくる。

秋…グッナイグッバイ

丹波栗は冷蔵庫で冷やして、一ヶ月ほどしてから栗剥きハサミでむきましょう。わたしの爪が柔らかくなってしまってあの硬い殻を思い浮かべると、そう思うだけでわたしの爪は剥けてしまうのだ。栗より先に剥けるのは空想であっても冷蔵庫で冷やされすぎて丹波は凍り付いて長い眠りについている。もうわたしには食べることはできませんです。だからさようなら。マロンちゃん。

冬…消えたチビクロサンボのバター

例のトラはまだわたしの家で過ごしているのだけれど、誰にも知られずにトラと暮らすのはなかなかリスキーなことではある。だがサンボはトラの餌になるのにチビとクロとまたチビとクロで、差別用語扱いになって岩波絵本から永久追放されてしまったのだ。いや、トラは椰子の周りを回り続けてバターになって、わたしはトラは食べないがバターを食べる。サンボにグッバイといえなかった腹いせに、トラは黄と黒をいからせている。